

『京都の平熱 哲学者の都市案内』

著 鷺田清一
写真 鈴木理策
講談社、2007年

立教新座中学校・高等学校 校長、元立教大学 教授
村上和夫



観光に関する本や記事には、そもそも旅行商品の普及や旅行のアイデアを提供する意図を持たずに書かれたものも多い。鷺田清一氏の『京都の平熱』（2007年初版、講談社）も、体裁は2006系統のバス路線にそって著者の生活と関わりを持つ地域を説明するガイドのようになっていて、その本質は記憶から生活の諸相を描いた本である。

あとがきに、「記憶は、油断しているとすぐに、よくできた「説明」にすり替わるからだ。「説明」にすり替わった記憶はもはや記憶ではない。そこにはわたしそのものよりも、ありそこねたわたしのほうが映しだされている。だから、よくできた記憶、辻褃のあった記憶のその脇に、まるで身を隠し眼だけぬつと出してそ

れをのぞいているわたしがいる、と言ったほうがまだ近い。」とあり、『京都の平熱』の執筆は「自己確認の旅」をまとめたものとある。

そうだとすると、この本をガイドブックとして読んで、2006系統のバス路線沿いの町を訪ねる旅は、正しくは、エスニックツーリズムでも、歴史町歩きでも、物見遊山の旅でもないことになる。『鷺田清一の記憶をたどる』の「読者の『京都の平熱』の読みで有り、もしそれを実際の旅程として旅をするならば、『記憶の追体験の旅』とするのが正しい。重要なポイントは、筆者が読者にどのような読みを期待しているかであり、エスニックツーリズムや歴史町歩きのような、あるいはツアーガイドの解説のような、旅行産業の「商品」として機能的な解説への期待に込めるものではない。本の副題に「哲学者の都市案内」とあるが、「哲学者」が、町を観る、住民から聞く、観光客などの通りすがりの人々を視野に収めることから生まれた記憶を綴ったものである。

例えば、本の前半「北へ」の章にある「高台寺塔頭一奇人たちの宿」の節で、寺院や民宿を説明した後、

「普通」が消えたまち」の節がつづき、その結論部は、「普通」という名で共有してきた信頼の空気が消えかかっているのかもしれない。危険な場所とは、「共同性」が解体されているところだとすれば、その解体がなによりも「普通」の場所ですべて起きているのかもしれない。」と極めて論理的な文で閉じられている。記憶を物語化しないで、記憶のもう一方の角に存在していた論理と結びつけた説明へと展開される。

哲学者と言う人物像（筆者）を用い、哲学の論理を素材として町を観てしまいう筆者の記憶の面白さを楽しむことができるのが本書の面白さである。



村上和夫（むらかみかずお）
立教新座中学校・高等学校校長、立教大学大学院社会学研究科応用社会学専攻修士課程修了。秋女子短期大学助教授、横浜商科大学商学部教授、立教大学社会学部教授等を経て2018年3月まで立教大学観光学部教授。日本観光研究会評議員、日本観光ホスピタリティ教育学会評議員。著書は『新現代観光総論』（共著、学文社、20015）、『たのしみを解剖する「アミューズメント」の基礎理論』（共著、現代書館、2008）、『観光地を磨くセンスアップのイノベーション』（共著、立教大学アミューズメント・リサーチセンター、2007）、『観光学入門』（共著、有斐閣、2001）など。